

発表日	平成 29 年 10 月 25 日 (水)	発表形式	講演 or ポスター展示
所属・氏名	環境科学研究所 堀 美智子		
発表名称	市民協働による生物調査 “こども「いきいき」生き物調査” 結果報告		
ジャンル	環境研究	部門	事業事例

1 はじめに

環境科学研究所では、地域の自然や生き物への関心を高めてもらうとともに、生物多様性保全に資する基礎データを得ることを目的として、2013年から毎年、約340校ある市立小学校と連携した生物調査、“こども「いきいき」生き物調査”を実施している。今回、2016年までの調査結果について、その一部を報告する。

2 調査方法

調査はアンケート形式で、夏休み前に主に小学5年生（市立小学校は2016年4月1日現在342校、5年生は約30,000名）に調査票（図1）を配布し、夏休み明けに回収した。前年9月1日から当該年の8月31日までの1年間に「家や学校の近く」（＝学区内）で見つかったり、鳴き声を聞いたたりしたものについて、季節ごとに○をつけてもらうこととした。なお、5年生以外の学年においても、参加希望のあった学校には調査票を追加配布し、調査に参加いただいた。

3 結果

2016年までの4年間で、重複を除き19種類の生き物について調査を行い、毎年150校以上（44～49%）の小学校、1万2千名前後の児童から回答を得ている。2016年は162校、10,984名から回答を得た。得られた回答から小学校ごと、生き物ごとに確認率（生き物確認者数/回答者数）を集計、算出した。その後、小学校の位置情報と合わせてGISソフトを用いて空間補間（クリギング）を行い、市内全域について確認率の高低を色の濃淡で図示、視覚化を図った。

(1) 「ツバメの巣」の結果

4年連続調査を行っている「ツバメの巣」の市全体の確認率は、2013年から順に77%、78%、77%と安定していたが、2016年に75%となり、統計的に有意に減少していることが分かった。

旭区周辺に確認率が高い地域があること、都筑区周辺に低い地域があることなど、4年間を通して共通した特徴も見られ、市内の分布の傾向としては、大きな変化はないと思われる（図2）。巣を作る場所や巣立ち後の幼鳥が休息する河川敷などの環境が減少し、ツバメは全国的に減少傾向にあることから、今後も定期的に確認状況を調査したい。

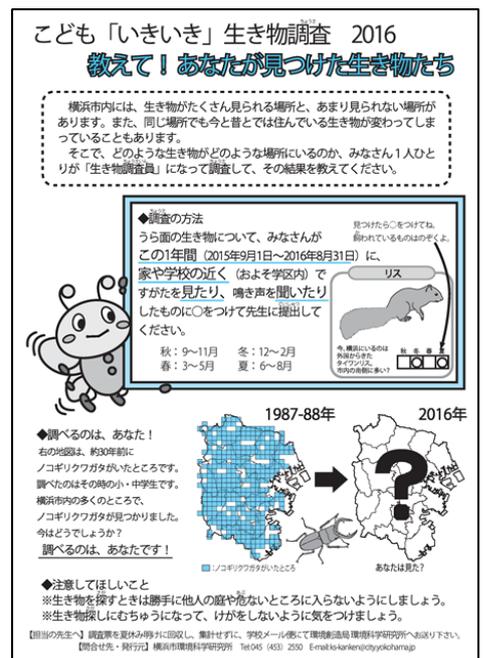
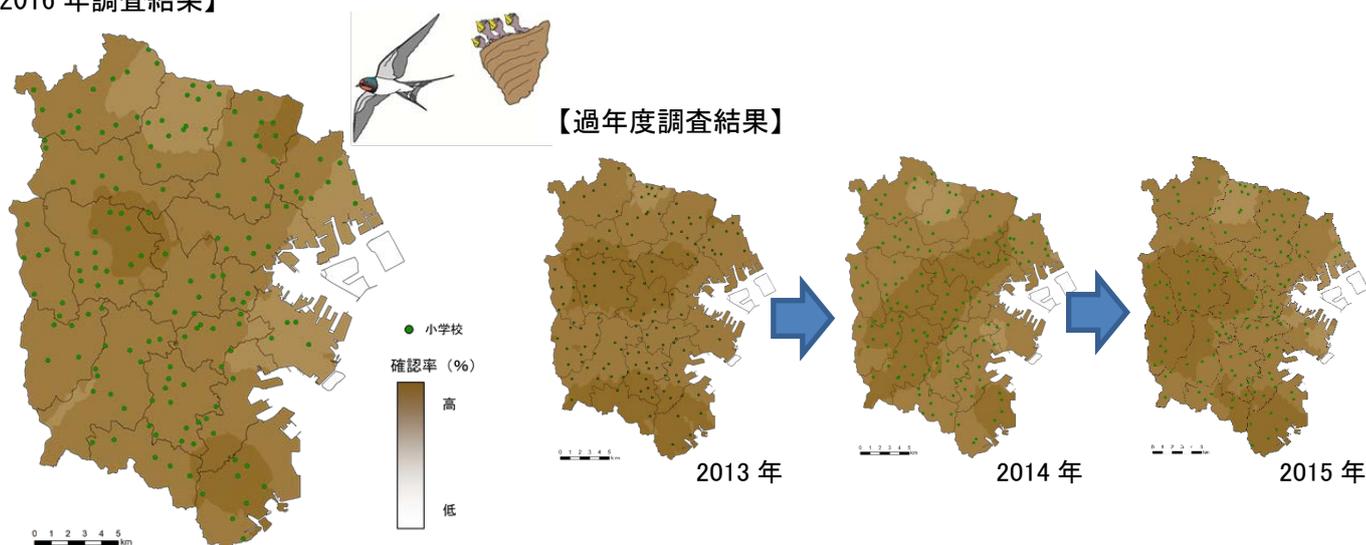


図1 2016年調査票(上:表、下:裏)

【2016 年調査結果】



【過年度調査結果】

図 2 ツバメの巣の調査結果の変化

(2) 「リス」の結果

「リス」は 2013 年、2016 年に調査を行っている。横浜市内にはホンドリスは生息せず、クリハラリス（タイワンリス）が生息している。クリハラリスはもともと横浜には生息していなかった外来種であり、南部を中心に生息し、北部には生息していないか、非常に少ない。

2016 年の調査では、学校ごとの確認率は 5 % から 100 % と差が大きかったが、2013 年の調査と比較して確認率の高い地域が北へ広がっている様子が確認できた（図 3）。

市全体の確認率も、3 年前の 35% から 3

ポイント上昇し、統計的にも有意に増加したことが明らかとなった。リスの分布域は変化の途上と考えられ、今後の動向が注目される。

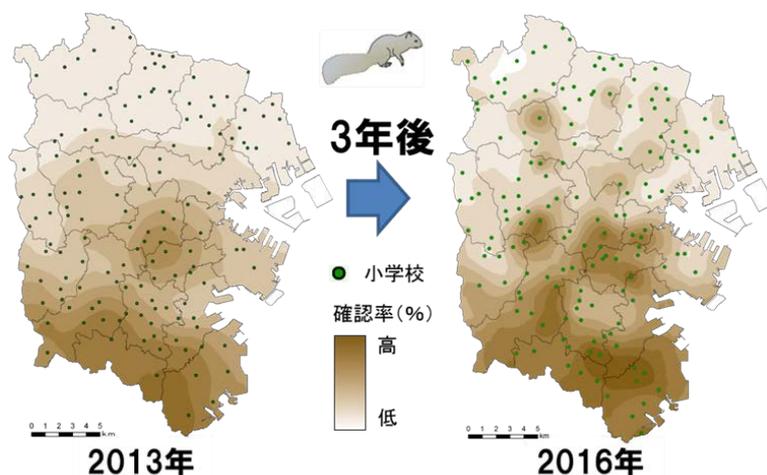


図 3 リスの調査結果の変化

4 今後の予定

各年の調査結果報告書および結果概要は、全小学校に配布するとともに、横浜市環境科学研究所 Web ページにおいて公開している。

本調査は、調査対象とする生き物の選定、組合せ等を工夫することにより、効率的かつ広域的な生物調査の手段として有効と考えられ、市民科学を活用した取り組みとして今後も継続して実施する予定である。

【こども「いきいき」生き物調査 Web ページ】

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/mamoru/kenkyu/data/forest/ikiiki.html>

【共同研究者】環境科学研究所 七里浩志、小森昌史 潮田健太郎、川村顕子